

越後妻有地域における仏像調査報告—天福山真浄院—

A report on the investigation of Buddhist statues in the Echigo-Tsumari region-
Tenpukusan Shinjo-in Temple

福島 治樹¹

HUKUSHIMA Haruki

(2025年3月7日受付; 2025年3月28日受理)

十日町市における指定文化財のうち、仏像については県指定が2件、市指定が9件ある。市内には未だ調査されていない寺社が多く存在するが、私見では江戸時代の優作も見受けられた。

本稿は令和5～6年にかけて四日町天福山真浄院で行われた仏像悉皆調査の結果を伝えるものである。今回の調査ではいくつかの仏像に銘文が確認され、このうちの2件については作者が判明した。制作年については記載がないが、片や江戸時代に活躍した京仏師一運法橋、片や明治時代に小千谷を拠点に活躍した彫刻師柳田昌穂の作であった。これらはこれまでの真浄院の歴史を補填するものであるとともに、郷土史における他地域との交流を表すものである。聞くところによると市内の他寺院でも同仏師の作と伝える仏像がいくつか存在する。今後もこれらの仏像を継続的に調査していくことが1つの課題であり、妻有地域における仏教文化の解明に繋がるだろう。

1. はじめに

現在、十日町市にはおよそ50の寺院が存在し、小さな堂なども含めると100を超えと考えられる(註1)。かつて十日町市や津南町などの周辺地域を総括して妻有地域と呼び、そこには妻有百三十三番霊場というのが存在し、多くの人がある名の通り133の霊場を巡った。

全国を見渡しても133も霊場があるという事例は稀で、通常は西国の三十三番霊場・坂東の三十三観音霊場・秩父の三十四観音霊場を合わせた百観音霊場とすることが多い。妻有地域における霊場の多さは、元々それぞれ美佐嶋三十四霊場・倉俣三十三霊場・大井平三十三霊場・吉田三十三霊場の4つ霊場を1つにまとめたことによる。

天福山真浄院は、十日町市四日町に位置する曹洞宗寺院で、妻有百三十三番霊場には含まれないものの江戸時代から歴史を伝える名刹の1つである。縁あって調査の機会に恵まれたため、本稿にて紹介していく。十日

町市における仏教文化の研究の一助となればと思う。

本稿は、天福山真浄院において行われた仏像の悉皆調査についてまとめたものである。調査は、令和5年6月25～26日・令和6年12月21～22日の計2回行った。

2. 作品解説

今回の調査では、29躯の仏像の調査を行った。像種としては、如来が2躯、菩薩が3躯、天部が3躯、羅漢が21躯であった。[法量]・[品質構造]・[銘文]・[制作年代]・[備考]の順で記す。紙面の都合上、銘文や特筆すべき点がない場合は[銘文]・[備考]を省き、注記の無い銘文についても墨書銘とする。また作品番号と十六羅漢像の名称については失伝しており、調査時に付与したアルファベットの名称を使用する。法量についてはcmを単位とし特段の変更がない場合は省略する。

以下に列举していく。

1 鶴見大学大学院博士課程学生 〒230-8501 神奈川県横浜市鶴見区2-1-3

(1) 木造釈迦如来坐像 (図1) 1 軀

[法量]

総高 137.4 像高 89.4 顎～頭頂 30.1 面長 15.4
面幅 18.3 面奥 23.3 耳張 23.6 肩張 44.8 肘張
56.4 胸厚 24.2 腹厚 29.2 像奥 65.7 台座高 48.0
台座幅 99.4 台座奥 91.1 光背高 146.0 光背幅
91.0

[形状]

釈迦如来の坐像。頭部は螺髪を表すが、後頭部については修理の影響か耳後ろに左右3本ずつ毛筋のみ彫る。水晶製の肉髻珠・白毫を嵌入する。耳朵は環状に彫る。三道相を表す。衲衣を通肩で纏う。禪定印を結び左足を下げ結跏趺坐する。

光背は蓮弁型拳身光の様式を取り、渦巻文様で表す。中心部を二重拳身光で表し、中心部上部には蓮肉を彫り出す。

台座は蓮華座・返花座・八角の框座を組み合わせて構成する。

[品質構造]

寄木造・玉眼嵌入・肉身部金泥・着衣古色。

木寄せは、後頭部に2材を寄せて3材で頭部をなす。体部の中心材は前後に矧ぎ内削りを施し、地付きより10cmの部分に左右の通い柄を設ける。通い柄の渡し部分については後補材を鋸で打ちつける。両肩部から地付きまでを左右に寄せ内削りを施す。脚部と体部を金具(後補)にて留めていた形跡が見られる。頭部は耳前で前後矧ぎを施し、玉眼を嵌入し挿首する。螺髪は彫出し、肉髻頂点から後頭部にかけて1部削られている。この部分については、体内より観察した際に別材で補っていることが確認された。

光背は、蓮弁部分を上・左・右の3材で造り、拳身光に継ぐ。光背下部の柄部分には別材で蓮華模様の材を継ぐ。台座は、須弥壇上から降すことが出来なかったため不明。

[制作年代]

江戸時代か

[備考]

真浄院の本尊である釈迦如来の坐像。制作年代については残念ながら数度の火災で寺史に関する史料の多くが失われており不明な点が多い。

(2) 文殊菩薩立像 (図2・4) 1 軀

[法量]

総高 92.0 像高 59.2 顎～頭頂 16.8 面長 7.0 面幅 5.8 面奥 7.8 耳張 7.0 袖張(天衣最大幅)26.0
胸厚 8.5 腹厚 9.9 裾張 11.5 足先開(外)9.0 台座高(蓮華・岩・框座含む)32.8 台座幅(框座)35.0
台座奥(框座) 26.0

[形状]

文殊菩薩の立像。条帛を身に纏い裳を履く。胸元には瓔珞、腕に天衣をつける。框座・岩座・蓮華座の組まれた台座に立ち、右手に宝剣、左手に経巻を持つ。

[品質構造]

木造・寄木造・玉眼・彩色・金泥・白毫水晶製・瓔珞銅製。木寄せについては彩色により不明な部分もあるが、両肩先別材とし、両腕・肘・手首で別材を継ぐ寄木造と考えられる。両足先別材。面部を矧ぎ玉眼を嵌入する。宝髻別材、白毫水晶製。唇に朱を差し、額上部生え際の毛・眉・もみあげ・口髭・顎髭を墨書きする。髪飾り・瓔珞金銅製。持物の宝剣・経巻は木製別材。天衣(垂下部・肘裏円形部)別材。肉身部を金泥で塗る。光背は欠失。

[銘文]

框座裏銘(框座向かって右側面)「法橋一運」(図3)

[制作年代]

江戸時代か

[備考]

本尊釈迦如来坐像向かって左に祀られる脇侍像。

(3) 普賢菩薩立像 (図5・7) 1 軀

[法量]

総高 93.6 像高 59.8 顎～頭頂 16.3 面長 6.2 面幅 6.1 面奥 8.1 耳張 7.3 袖張(天衣最大幅)24.9
胸厚 8.4 腹厚 9.8 裾張 11.8 足先開(外)9.3 台座高(蓮華・岩・框座含む)33.8 台座幅(框座)35.0
台座奥(框座)25.1

[形状]

普賢菩薩の立像。条帛を身に纏い裳を履く。胸元には瓔珞、腕に天衣をつける。框座・岩座・蓮華座の組まれた台座に立ち、両手で先端の欠失した茎を持つ。

[品質構造]

木造・寄木造・玉眼・彩色・金泥・白毫水晶製・瓔珞銅製。木寄せについては彩色により不明な部分もあるが、両肩先別材とし、両腕・肘・手首で別材を矧ぐ寄木造と考えられる。面部矧ぎとして玉眼を嵌入する。宝髻別材、白毫水晶製。唇に朱を差し、額上部生え際の毛・眉・もみあげ・口髭・顎髭を墨書きする。髪飾り・瓔珞金銅製。

持物の宝剣・経巻は木製別材。天衣(垂下部・肘裏円形部)別材。肉身部を金泥で塗る。光背は欠失。

[銘文]

框座裏銘(框座向かって右側面)「法橋一運」(図6)

[制作年代]

江戸時代か

[備考]

本尊釈迦如来坐像向かって右に祀られる脇侍像。

(4) 僧形倚像 1 軀

[法量]

総高 74.5 像高 40.3 臂張 28.2 袖張 36.6 像奥 23.0 垂下部長 21.0 垂下部幅 37.8 台座高(上畳み含む)30.5

[形状]

僧形の坐像。曲縁に坐し、襦袢・內衣・法衣を纏う。腹前で右手に払子を持ち、左手で毛先を握る。

[品質構造]

木造・寄木造・挿首・玉眼・彩色。

[制作年代]

近代か

[備考]

本尊の須弥壇向かって右脇壇に祀られる僧形の倚像。寺伝では天堂如浄、もしくは曹洞宗の高祖道元希玄と伝える。

(5) 達磨大師坐像 1 軀

[法量]

像高 36.5 膝張 16.7 垂下部長 17.1 垂下部幅 30.6 台座高 63.9

[形状]

僧衣を纏い曲縁に座す達磨大師の像。両手先は袖にて隠す。

[品質構造]

木造・寄木造・玉眼・彩色。

[制作年代]

近代か

[備考]

(4)の僧形像と共に右脇壇に祀られる禅宗の開祖達磨大師の坐像。曹洞宗においては後述の大権修理菩薩と共に本堂へと対で祀られる事が多い。このため同時に造像されることが多く、本像も例に漏れず同時期の造像である可能性が高い。

大本堂内の木札中に、「大権修理菩薩／初祖達磨大師寄進 二瓶五右衛門」と記すものがある。この二瓶某は、同寺本堂内の馨子(明和八年・1771 鑄造)を寄進した人物の1人である。この事から木札に記されている像は、本像の前身像にあたると思われる。

(6) 大権修理菩薩倚像 1 軀

[法量]

像高 30.7 膝張 24.2 垂下部長 14.7 垂下部幅 30.8 台座高 64.3

[形状]

道服を纏い曲縁に座す大権修理菩薩の像。右手を額の正面に当てて遠望相を表す。

[品質構造]

木造・寄木造・玉眼・彩色。

[制作年代]

近代か

[備考]

(4)僧形像・(5)達磨大師像と共に右脇壇に祀られる禅宗における土地神。達磨大師像と同じく前身像があった可能性が高い

(7) 地藏菩薩立像 1 軀

[法量]

総高 70.5 像高 50.2 臂張 15.5 袖張 17.2 腹厚 8.6 裾張 11.0 光背高 61.2 光背幅 20.5 台座高(岩座含む)9.3 台座幅 25.4 台座奥 18.0

[形状]

岩座に立つ地藏菩薩の立像。右手で錫杖を突き、左手で宝珠を護持する。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色・白毫水晶製・瓔珞金銅製。

[制作年代]

江戸時代作か

(8) 毘沙門天立像 1 軀

[法量]

総高 64.9 像高 52.7 光背高 19.7 台座高 12.2

[形状]

方形台座上の邪鬼に立つ毘沙門天立像。右手に三叉戟を、左手に宝塔を護持する。慶派などに多く見られる単髻を採用する。光背は法輪型を基礎として左右上部の3か所に火焰光を別材で表す。

[品質構造]

木造・一木造・彫眼・彩色・金泥。

[制作年代]

近代か

(9) 韋駄天立像 1 軀

[法量]

総高 48.9 像高 40.3 光背高 19.7 台座高 8.6

[形状]

方形台座上の岩座に立つ韋駄天立像。両手で右足先に宝棒を突く。

[品質構造]

木造・一木造・彫眼・彩色・金泥。

[制作年代]

近代か

(10) 釈迦如来立像 1 軀

[法量]

総高 73.7 像高 53.4 顎～頭頂 10.9 面長 6.4 面幅 7.2 面奥 7.7 耳張 7.3 臂張 17.4 胸厚 8.9 腹厚 10.1 足先開(外)10.2 台座高(框座含む)20.3 台座幅 30.2 台座奥 24.3

[形状]

与願・施無畏印を結ぶ釈迦如来の立像。

[品質構造]

木造・寄木造・玉眼・古色・白毫肉髻水晶。

木寄せについては体部を前後矧ぎとし、割り首を行う。頭部は耳前で前後に矧ぐ。両手首から先と、足先と足裏のほぞに別材を寄せる。足裏のほぞ接続部分には金箔の痕跡あり。

台座については、蓮華座・岩座・框座で構成されている。蓮華座は金箔、岩座は古色、框座は金箔で仕上げられており後補とみられる。

[銘文]

台座裏銘 上段「志ん志ゅ郎以上」 中段「志ん志ゅ郎以上」 下段「志ん志ゅ郎以上」

[制作年代]

江戸時代か

[備考]

阿難尊者像(11番)と迦葉尊者像(12番)とは一具を成すと考えられ、何れかの御堂からの客仏である可能性が考えられる。

(11) 阿難尊者立像 1 軀

[法量]

総高 81.6 像高 54.0 臂張 18.9 腹厚 8.7 光背高 63.5 台座高 27.6 台座幅 32.4 台座奥 24.2

[形状]

通肩で袈裟を懸け胸前で合掌する仏弟子阿難の立像。

[品質構造]

木造・寄木造・玉眼・彩色。

木寄については、体部を一木。頭部は挿し首とし、面部を矧ぎ、玉眼を嵌入する。

[制作年代]

江戸時代か

[備考]

本像は10番の釈迦如来像と12番迦葉尊者像と共に三尊として本堂大縁突き当りの須弥壇に祀られている。中尊とみられる釈迦如来像よりもやや彫技が硬く同時期の制作とは考えにくい。

(12) 迦葉尊者立像 1 軀

[法量]

総高 84.7 像高 56.9 臂張 18.2 腹厚 9.8 光背高 63.6 台座高 27.8 台座幅 32.1 台座奥 25.0

[形状]

偏袒右肩で袈裟を懸け胸前で合掌する仏弟子迦葉の立像。

[品質構造]

木造・寄木造・玉眼・彩色。

木寄については、体部を一木として足先や左右裾先を別材で造る。頭部は、挿し首とし、耳後ろと面部の2か所を矧ぐ。

[制作年代]

江戸時代か

[備考]

本像は10番釈迦如来像と11番阿難尊者像と共に三尊として本堂大縁突き当りの須弥壇に祀られている。中尊とみられる釈迦如来よりもやや彫技が固く同時期の制作とは考えられない。

(13) 聖徳太子立像 1 軀

[法量]

像高 48.8 臂張 17.0 袖張 16.2 腹厚 9.2

[形状]

頭部の左右に美豆良を結び、体の正面で両手を構え、左

手に柄香炉をもつ聖徳太子の立像。

[品質構造]

木造・寄木造・玉眼・彩色。

両肩先袖先を含む体幹部を一材とし、両手・両靴先を別材とする。持物の柄香炉は別材。

[制作年代]

江戸時代

[備考]

本像は美豆良を結び、左手で柄香炉を持つ姿から一見すると孝養太子像のように思われるが、もう片方の手で持物(欠失)を持つ。この形式は浄土真宗に多く見られ、摂政太子と呼称することが多い。

聖徳太子像については、本堂内木札に「聖徳太子真像・永平和尚画像寄進 山田喜左衛門」と記すものがある。同木札が絵画を指す可能性もあり、本像がこれにあたるかは不明であるが一考の余地がある。

(14) 十六羅漢像(A~P) 16 軀

A 尊者坐像(図8)

[法量]

像高 34.0 膝奥 20.1 垂下部長 13.3 垂下部幅 26.5
光背高 41.0 頭光経 25.2 台座高 23.8 台座幅 38.0
台座奥 27.5

[形状]

白色の內衣を纏い、そのうえに橙色の法衣を纏う。左肩には外が群青色で内が赤色の袈裟を懸け、肩の赤紐で吊る。

非常に立体的に表した眉を顰め正面を望む。口には朱をひき、口髭を墨画する。右手は人差し指を伸ばし、その他の指を念じ腹前に構える。左手は膝上に添える。

[品質構造]

木造・一木造・挿首・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[銘文]

台座地付部天板銘「柳田／昌穩／□作」 台座前面銘「第二」(図10)

[制作年代]

明治時代

B 尊者坐像(図9)

[法量]

像高 35.5 膝奥 18.7 垂下部長 12.6 垂下部幅 26.4
光背高 46.8 頭光経 24.3 台座高 23.0 台座幅 37.6
台座奥 27.2

[形状]

赤色の法衣を偏袒右肩で纏い、左肩から緑色の横被をかける。足先の部分からは白色の裙が確認できる。

顔をしかめて左前方を睨む。左手で鉢を持ち、右手を鉢に添える。右肩付け根と右手首には臂釧を付ける。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[制作年代]

明治時代

C 尊者坐像(図11)

[法量]

像高 35.2 膝奥 19.1 垂下部長 15.2 垂下部幅 27.0
光背高 47.1 頭光経 24.2 台座高 29.2 台座幅 35.9
台座奥 26.8

[形状]

紺色の法衣を偏袒右肩でまとい、左肩から赤色の横被を懸ける。足先からは白色の裙が確認できる。

顔をしかめて左前方を睨む。両手を左太もも上に置く。右肩付け根と右手首には臂釧を付ける。

[品質構造]

木造・一木造・挿首・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[制作年代]

明治時代

D 尊者坐像(図12)

[法量]

像高 34.7 膝奥 19.3 垂下部長 14.3 垂下部幅 27.6
光背高 44.9 頭光経 24.2 台座高 31.0 台座幅 37.9
台座奥 27.6

[形状]

緑色の法衣を頭から被り、両足を組む。その上に両手で印を結ぶ。両手先を衣で隠し、法衣を台座に垂下する。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[銘文]

像底部銘「第四番」

[制作年代]

明治時代

E 尊者坐像(図13)

[法量]

像高 33.3 膝奥 19.1 垂下部長 15.5 垂下部幅 27.0

光背高 46.4 頭光経 24.3 台座高(岩座含む)29.4
台座幅(框座含む)38.1 台座奥 27.4

[形状]

偏袒右肩で赤色の法衣を纏い、茶色の袈裟を懸ける。垂下する右足には緑色の裙が確認できる。

顔をしかめて前方を睨む。両手で膝上に柄香炉を持つ。右肩付け根と右手首には臂釧を付ける。肩から紐を垂らし袈裟環を結ぶ。左足を組み、右足を垂下する。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[銘文]

像底部銘「第八番」

[制作年代]

明治時代

F 尊者坐像 (図 14)

[法量]

像高 35.3 膝奥 26.1 垂下部長 13.9 垂下部幅 27.4
光背高 47.0 頭光経 24.3 台座高(岩座含む)23.0
台座幅(框座含む)27.9 台座奥 21.8

[形状]

偏袒右肩で瑠璃色の法衣を纏い、橙色の横被をつける。顔をしかめて前方を睨む。右手は肩前で念じ、左手は膝上で蓮の葉を持つ。右肩付け根と右手首には腕釧・臂釧を付ける。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[銘文]

像底部銘「第十一番」

[制作年代]

明治時代

G 尊者坐像 (図 15)

[法量]

像高 49.2 膝奥 18.5 垂下部長 14.0 垂下部幅 25.6
光背高 46.7 頭光経 24.1 台座高(岩座含む)23.5
台座幅(框座含む)37.8 台座奥 27.3

[形状]

偏袒右肩で緑色の法衣を纏い、左肩に横被をかける。垂下する左足には瑠璃色の裙が確認できる。

顔をしかめて前方を睨む。右手で笏を前面に持ち、左手を膝上に添える。右手首には臂釧を付ける。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[銘文]

像底部銘「第十六番」

[制作年代]

明治時代

H 尊者坐像 (図 16)

[法量]

像高 35.3 膝奥 21.3 垂下部長 12.1 垂下部幅 26.2
光背高 47.4 頭光経 24.2 台座高(岩座含む)29.5
台座幅(框座含む)37.7 台座奥 27.5

[形状]

赤色の法衣を纏い、青みがかった鼠色の横被をかける。垂下する右足先には緑色の裙が確認できる。

顔をしかめてやや左前方を睨む。右手に五鈷鈴を持ち、左手を膝上に添える。右手首には臂釧を付ける。左足を右太腿上に組み、右足を垂下する。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[備考]

像底部銘「第三番」

[制作年代]

明治時代

I 尊者坐像 (図 17)

[法量]

像高 49.3 膝奥 18.6 垂下部長 13.0 垂下部幅 29.4
光背高 47.1 頭光経 24.4 台座高 29.4 台座幅 37.8 台座奥 27.8

[形状]

白色の法衣を偏袒右肩で纏い、赤色の横被をかける。垂下部からは緑色の裙が確認できる。

相好を崩し正面を向く。右手で木杖を右足付近に突き、左手は膝上で手を握る。左手のうちには持物を持っているとみられる空間があるが欠失。右腕の肩と手首には釧を付ける。垂下する両足には緑の衣が見える。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[銘文]

像底部銘「第五番」

[制作年代]

明治時代

J 尊者坐像 (図 18)

[法量]

像高 50.2 膝奥 17.0 垂下部長 13.0 垂下部幅 26.8
光背高 45.5 頭光経 24.0 台座高 27.4 台座幅 37.7
台座奥 27.5

[形状]

赤色の法衣を偏袒右肩で纏い、緑色の横被をかける。両足先からは黒色の裙が確認できる。

瞋目し、右手を右肩横に掲げ蓮華と水を持つ。左手は左膝上置く。右足を組み、左足を垂下する半跏踏み下げとする。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[制作年代]

明治時代

K 尊者坐像 (図 19)

[法量]

像高 35.8 膝奥 19.0 垂下部長 14.5 垂下部幅 26.5
光背高 46.5 頭光経 24.0 台座高 23.5 台座幅 36.0
台座奥 27.0

[形状]

緑色の法衣を偏袒右肩で纏い、白色の横被をつける。足先には赤色の裙が確認できる。

瞋目し、正面を向く。右手は体側面で宝珠を掲げ、左手は数珠を握る。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[銘文]

台座(框座上部〈岩座下〉)銘「第二」

[制作年代]

明治時代

L 尊者坐像 (図 20)

[法量]

像高 35.8 膝奥 17.5 垂下部長 13.8 垂下部幅 27.8
光背高 47.3 頭光経 24.5 台座高 24.0 台座幅 24.0
台座奥 27.5

[形状]

赤色の法衣を偏袒右肩で纏い、茶色の横被をつける。足先には淡い藍色の裙が確認できる。

口を真一文字に結び穏やかな面相を正面に向ける。頭頂部分は剃髪とするが、巻き毛を頭の脇部分に残す。眉毛

と髭についても同様の巻き毛で表現する。胸前に両手で経巻を持つ。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色。

[銘文]

像底部銘「第七番」

[制作年代]

明治時代

M 尊者坐像 (図 21)

[法量]

像高 37.2 膝奥 18.5 垂下部長 13.1 垂下部幅 27.6
光背高 46.8 頭光経 24.2 台座高 28.8 台座幅 38.1
台座奥 27.4

[形状]

淡い緑色の法衣を偏袒右肩で纏い、白色の横被をつける。足先には朱色の裙が確認できる。

肌色を乳白色で表す他の像とは異なり、色白に見えるよう彩色する。若相で遠くを諦観の眼差しで望む。右手は体重をかけるように岩座に突き、左手は岩座上に立てた左足の膝上に置く。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色。

[制作年代]

明治時代

N 尊者坐像 (図 22)

[法量]

像高 33.4 膝奥 19.3 垂下部長 12.7 垂下部幅 27.4
光背高 45.8 頭光経 23.7 台座高 27.6 台座幅 38.2
台座奥 27.3

[形状]

白色の內衣に黒色の法衣を纏い、その上から緑色の横被をつける。横被は1部翻っている箇所から内側が赤色となっていることが確認できる。

目を見開き、左前方を望む。両手を僧衣と袈裟で隠し左膝に置く。

[品質構造]

木造・一木造・挿首・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[銘文]

像底部銘「第十三番」

[制作年代]

明治時代

O 尊者坐像 (図 23)

[法量]

像高 34.1 膝奥 19.2 垂下部長 14.5 垂下部幅 26.5
光背高 40.6 頭光経 25.3 台座高 (岩座含む) 29.3
台座幅 (框座含む) 37.9 台座奥 27.3

[形状]

黄色の内衣に緑色の僧衣を纏い、その上から青色の横被をつけ、袈裟を懸ける。袈裟は外側を朱色として内側を藍色で表す。左肩には円形の袈裟環をつけ、後ろから紐で袈裟を吊る。

厳しい表情で前方を望む。右手は右膝上で持物を持つ形をとり (現在欠失)、左手は左膝上に置く。

[品質構造]

木造・一木造・挿首・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[銘文]

像背腰部朱漆銘「青室貞松信女／禪室慧濤信女／善山妙恵信女／施主 山田與齋 (与齋か) (図 26)

台座地付部正面銘「第一／柳田昌穂／御作也」(図 25)

[制作年代]

明治時代

[備考]

銘文にある施主山田与齋については不明だが、台座銘にある柳田昌穂は明治時代に小千谷市を中心に活動した彫刻師である。詳細については別記する。

P 尊者坐像 (図 24)

[法量]

像高 35.7 膝奥 21.2 垂下部長 11.2 垂下部幅 26.5
光背高 48.0 頭光経 24.3 台座高 (岩座含む) 22.2
台座幅 (框座含む) 37.9 台座奥 27.5

[形状]

赤色の法衣を纏い、その上から白色の横被をつける。左足先には、緑色の裙が確認できる。

瞋目して正面を望む。右手は体重をかけるように岩座に突き、左手は左膝上に置く。左足先付近には緑色の下衣を覗かせる。他の像とは異なり岩座ではなく虎座に坐する。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[制作年代]

明治時代

未調査像

僧形坐像 (道元禅師か)

3. 重要作例 本尊釈迦三尊像・十六羅漢像

今回の調査作例のうち文殊菩薩立像・普賢菩薩立像・聖徳太子立像・十六羅漢坐像に銘文が発見された。このうち聖徳太子の除く3点は仏師名が判明し、おおよその制作年が推測される。

文殊菩薩立像・普賢菩薩立像

まず文殊菩薩立像・普賢菩薩立像の作者とみられる一運法橋は、近世仏師事績データベースに製作・修復が6件、地誌類の記述が4件報告されている(註2)。データベース上で最も古い事績としては天和3年(1683)に徳島つるぎ町見性寺の如意輪観音坐像造像が挙げられる。銘記位置は台座で、墨書にて「大仏師一運法橋作」と記される(註3)。逆に最も新しい事績としては、享保元年(1716)山梨南アルプス市円通寺の如意輪観音坐像の造像が挙げられる。銘記位置は台座で、墨書にて「京極通り二条下ル／宇兵衛／京大仏師法橋一運／息子／大仏師全心」(註4)と記される。活動期間としては天和3年(1683)～享保元年(1716)頃までとみられる。

今回の文殊普賢両像は、先述のように台座裏に墨書銘が記され、いずれも「法橋一運」と記す。年紀は無く、造像年は不明である。

真浄院は、天正年中(1573～1591)に創建されてから過去2・3度の火災にあっている。過去帳では「当院八世即円代之元禄十一年六月十三日夜出火諸堂残らず焼失し、元禄十三年八月十二日に上棟した。亦当山十世在仙和尚代又々焼失し十一世雲蓋和尚代に本堂建立」と記す(註5)。

中条中林の享保15年(1730)の記録では「六月八日午後九時半四日町真浄院出火いたし、午前二時迄に方丈庫裡山内衆寮迄残らず焼け払い」とある(註6)。

また尾崎小川弥左工門の記録では「真浄院焼失の処、幸い上田に註文はづれあり、買い求めその代金本堂九十両で、出来上り百両と一寸で寄付は云々」と記し、享保17年(1732)の記録では「七月廿日真浄院上棟九月廿日入仏供養」と記す。同19年(1734)の記録では「四日町庫裡建立六月十六日に上棟」、寛延4年(1751)には「天福山七月八日隠寮建立五月十五日上棟」と記す(註7)。

これらの記録を火災に注目して整理すると以下のよう

になる。

イ) 元禄 11 年 (1698)6 月 13 日

8 世覺湛即圓の代の火災 (過去帳)

ロ) 年次不明

10 世大安在仙の代の火災 (過去帳)

ハ) 享保 15 年 (1730)6 月 8 日

午後 9 時半に四日町真浄院で出火し、午前 2 時までの方丈庫裡山内衆寮焼失 (中条中林)

イの火災に際に住職を務めていた真浄院 8 世覺湛即圓は 7 世榮岩雷尊の法嗣であり、貞享 5 年 (1668) に總持寺へと瑞世している。受業師は存越 (真浄院 5 世)、嗣法師は雷尊 (同 7 世) が務めている。残念ながら住持していた期間についての記録はないが、次代の 9 世可岩虎有が元禄 15 年 (1702)8 月 4 日に總持寺へ瑞世していることからこれ以降もしくは宝永 7 年 (1710) の示寂を機に世代を交代したとみられる (註 8)。

ロの火災で住持を務めていたとされる真浄院 10 世大安在仙は、宝永 7 年 (1710) に總持寺へ瑞世している。だが寺院については円蔵寺と記しており、少なくとも瑞世の段階では真浄院所属ではない。受業師は即圓 (真浄院 8 世) が務め、嗣法師は堅寧 (十日町市松林山相国寺 6 世か) が務めている。享保 6 年 (1721) には 9 世可岩虎有が示寂しておりこの前後から、11 世雲蓋僧鼎が總持寺へ瑞世した享保 15 年 (1730)8 月 5 日前後に世代を交替したと考えられる (註 9)。過去帳では雲蓋の代に本堂建立と記す (註 10)。

ハの火災では住持についての記録がない。イの時の再建は元禄 13 年 (1700)8 月 12 日に上棟し、ハの時の再建は享保 17 年 (1732)7 月 20 日に上棟・入仏供養を行っている。ロの記録は再建が 11 世の代となっており年記が合致する。つまり 10 世から 11 世への交代は享保 17 年以前となる。

両脇侍は台座の銘文から作者が判明しており、前述の一運の造像活動期間に最も近いのは享保 17 年の入仏供養である。この時期に住持であった 11 世雲蓋僧鼎は大梅法撰の弟子であり、兄弟弟子には、徳川綱吉の側用人柳沢吉保・荻生徂徠・細井廣澤などがある。寺室の中にはこれら由縁の品も伝わっている。再建にあたって京仏師が選定されたとしても不思議ではない。現状、享保元年 (1716) 以降の事績は確認されておらず、この像が享保 17 年頃の造像であれば現時点での一運法橋最晩年の作となる。文殊普賢菩薩像の作例が他に発見されていないため比較検討が困難であるが、これについては今後

の課題としたい。

十六羅漢像

十六羅漢像の作者柳田昌穂はお隣の小千谷市を中心に活躍した近代彫刻家である。遺作の大半を欄間彫刻が占めており、仏像の作例についてはまだまだ研究が進んでいない。

幸いにも昌穂に関する記録が多く残されており以下にその人生をまとめていく。

小千谷市吉谷町打越で天保 5 年 (1834)7 月 11 日に、柳田久左衛門昌翁 (生没年不明) の子として生まれる (註 11)。祖父に柳田庄左衛門善慶 (註 12) を、曾祖父に柳田照道 (註 13) をもつ。昌穂は明治 45 年 (1912)1 月 (註 14) に亡くなるまでに、多くの作品を残しているが、年次の判明している作品は非常に限られる。

代表的な事績としては、明治 33 年 (1900) に、パリで行われた万国博覧会に「額縁置物台付」(註 15) を出品し、銀牌を受賞している。その他には小千谷市吉谷村大雄山円満寺へ明治 33 年 8 月に水子地蔵尊を納めている (註 16)。この銘文は 2 種類の筆跡からなり、一つは善慶と記すもの、もう一つはそれを墨消して柳田庄左衛門の名と年紀を記すものがある。この時期には既に善慶が没していることから、昌穂が修理を行い祖父の墨書を墨消した可能性が高い。その他には旧小澤家住宅仏壇 (新潟市指定文化財) なども造像しており、今後の研究によってはさらに多くの作例が発見される可能性が高い。

今回銘文が発見された十六羅漢像は、真浄院の檀家と考えられる山田氏が寄進したものである。過去帳との照合により時期がより詳細にわかる可能性が高い。これについても今後の課題とする。

4. おわりに

今回は天福山真浄院にて調査した作例について記した。関連する作例については調査が及ばず、一運法橋や柳田昌穂についてはさらなる研究の余地がある。

今後は市内の寺院の調査を進めるとともに、これらの作例が日本彫刻史におけるどのような立ち位置にあたるのか見直していきたい。

謝辞

今回の執筆にあたり、天福山真浄院東結真住職に手

厚い支援をいただきました。調査では、鶴見大学緒方啓介先生・森咲音氏・岸野愛奈氏・宮本晃成氏にご協力いただきました。

また本調査は、真浄院檀家総代福島竹作氏との縁によるものであり、合わせてここに感謝申し上げます。

満寺インスタグラム7月16日投稿 (<https://www.instagram.com/p/C9eFYIezX5b/?igsh=ajNwc2RwamVoeWFq>)

註

- 1：十日町市には後述する妻有百三十三番霊場があり、この中には今日まで続いてきた寺院が多く存在する。これらについては十日町市・中魚沼郡青年僧侶の会 編 1985『妻有の百三十三番 ふる里の霊場巡り』、新潟県第1宗務所第8教区青年僧侶の会 2024『越後妻有ふるさとの寺』で紹介されている。
- 2：近世仏師事績データベース <http://www.busshi.net/search.cgi>
- 3：つるぎ町教育委員会 編 2007、『つるぎ町の文化財』
- 4：息子の部分は弟子の誤読とみられる。南アルプス市教育委員会 編 2011『南アルプス市内仏像等悉皆調査報告書』参照
- 5：竹内道雄 編 1997『念五世晋山記念 天福山真浄院史資料』所収の丸山哲英 1989「真浄院史考」『昭和還暦大井田物語』十日町市公民館大井田分館
- 6：註5を参照
- 7：註5を参照
- 8：納富常天・尾崎正善 編 2011『住山記—總持禪寺開山以来住持之次第—』大本山總持寺
- 9：註8を参照。余談ではあるが、雲蓋僧鼎の受業師は在仙(真浄院10世)が、嗣法師は大梅(長野宝寿山正安寺16世大梅法撰)が務めている。真浄院においては11世からその後20世まで大梅の法系が続く。
- 10：註5を参照
- 11：岩下庄之助 1980『小千谷郷土物語』歴史図書社
- 12：小千谷市文化財協会 編 1984『年表小千谷』小千谷市青木山極楽寺の伽藍造営や同寺明石堂の再建で棟梁を務めた。
- 13：註12を参照
- 14：『越佐工芸家名鑑』新潟県美術商組合昭和59年(1984)では23日とするが、『年表小千谷』は28日とする。
- 15：註12を参照、小千谷市史編修委員会 編 1969『小千谷市史上巻』では高砂の翁媪と記す。
- 16：令和6年正月にあった能登半島地震にて蓮華座より墜落し修理した際に銘文が発見された。大雄山円



图1 本尊 釈迦如来坐像



图2 左脇侍 文殊菩薩立像



图3 文殊菩薩立像 框座裏銘



图4 文殊菩薩立像 拡大



图5 右脇侍 普賢菩薩立像



图6 普賢菩薩立像 框座裏銘



图7 普賢菩薩立像 拡大



図8 十六羅漢像 A尊者



図10 十六羅漢像 A尊者 台座地付部天板銘



図11 十六羅漢像 C尊者



図9 十六羅漢像 B尊者



图 12 十六羅漢像 D 尊者



图 14 十六羅漢像 F 尊者



图 13 十六羅漢像 E 尊者



图 15 十六羅漢像 G 尊者



图 16 十六羅漢像 H 尊者



图 18 十六羅漢像 J 尊者



图 17 十六羅漢像 I 尊者



图 19 十六羅漢像 K 尊者



图20 十六羅漢像 L尊者



图22 十六羅漢像 N尊者



图21 十六羅漢像 M尊者



图23 十六羅漢像 O尊者



图24 十六羅漢像 P尊者



图26 十六羅漢像 O尊者 像背腰部朱漆銘

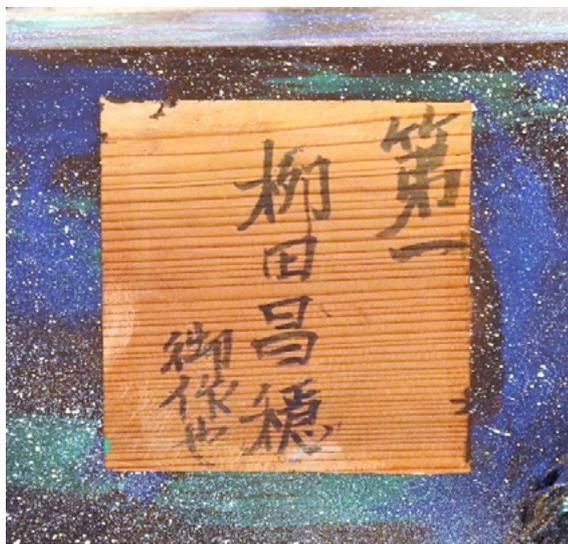


图25 十六羅漢像 O尊者 台座地付正面部銘